寄生獣　【後藤討伐戦後】

だまぱんだはら

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

・原作の概要

パラサイトと呼ばれる寄生生物が人間に寄生し、人間の脳を奪って全身の統率権を奪う。普段は普通の人間のふりができるが、人間を捕食したり攻撃したりするときは頭が筋肉状の触手に変化し、また、その先端には鋭い刃物がつき、簡単に人間をなぎ倒すことができる。

右手にパラサイトが寄生してしまった主人公・泉新一は様々なパラサイトの危険にさらされながら、右手に寄生するパラサイトである「ミギー」と協力して生き延びていく。また、ミギーと共に過ごすうちに、「人間を殺すから生きる価値がない、とパラサイトを

殲滅しようとする人間」と、「地球や他の生命体を脅かす存在である人間にとって唯一の天敵であるパラサイト」の板挟みとなって悩み考え、自分なりの答えを出していく。

・登場人物

新登場する人物があれば、そのたびごとに前書きで記す。

目　次

第1話　プロローグ　――――――　1
第2話　警察とパラサイト（1）
第3話　警察とパラサイト（2）
第4話　警察とパラサイト（3）

第1話　プロローグ

泉　新一は幸運にも青酸系毒物が混入した釘を後藤に刺したことで後藤を倒すことができた。後藤は複数のパラサイトから成る複合生命体であり、その強力なスピード、耐久力、攻撃力、回復力などすべての面で新一より勝っていたが、新一の幸運と新一の最後まで諦めない心が幸いした。

ごみを大量に廃棄し、空気や土壌、水質を汚染し、我が物顔で世界を支配する人間は、地球や他の生命体にとって毒でしかない。その毒である人間を上回る存在であるパラサイトは地球にとって必要な存在なのではないだろうか。特に多くのパラサイトの集合体である後藤は、市役所におけるパラサイト殲滅戦において、単独で生き残り警察を皆殺しにできるほど強力であり、人間を〝間引き〟するうえでは欠かせない存在なのではないだろうか。

殺したくない…

後藤は自分を殺そうとしたのは事実だが、今ここで必死に回復しようとしている生物を「人間の勝手な都合」で殺すなんてしたくない。新一はそう思った。

見逃すのは、人間としては明らかな罪といえる。また、今逃したら後で自分が死ぬこ

とになる。しかし、生き延びようと必死にもがくこの「後藤」という生物を人間の都合で勝手に殺すのはいかがなものか。人間を殺すから生きる価値がない、生きていてはいけない、と人間が判断して実行する権利があるのだろうか。この生物も生きる権利があるのではないか。

しかし、ここで見逃すということはすなわち自分の死を意味する。また、自分の死に際して身近な人間も巻き添えで死ぬかもしれない。今まで死んでいった友人たちの死を無駄にすることになる。彼らは自分のせいで死んだと言っても過言ではない。しかし彼らの死が今の自分の生につながっていることは疑いようもない。ここで後藤にとどめを刺さないことは彼らに報いない行動であることは間違いないだろう。

殺すか、殺さないか。

殺しても殺さなくても罪となる。新一は葛藤した。

生物は本来自分の命が大事だ。自分の同種の命が大事だ。自分の命を守るために、同種の命を守るために、他種を殺すのだ。それは自然の摂理でもあるし、本能的にそれが最も大事なことなのは痛感している。

新一は鉈を振り上げ、後藤の意識の中枢神経が集まる脳を破壊した。そして新一は後藤の亡骸にただただ謝った。人間の都合を通したことをただ謝ることでしか償えなかった。

暗い山道を下り、老婆・美津代さんの玄関に貸してくれた鉈を置いた。
生きて帰ってこれた。この玄関を出たときは死しか考えていなかった。自分のせいで村の人間たちが殺されるわけにはいかない。今まで死んできた友人たちのことを考えれば、こんどは村人たちのために自分が命を投げ出す番だと、半ばあきらめていた。そんなある種の開きなおりをしていた新一に美津代さんがいったあの言葉。
「どんなことがあろうとも決してあきらめず臨機応変にね・・・・・」
あの言葉を決して忘れない。あの言葉に命を救われたんだ。

新一は固くそう決意した。
徐々に上がってくる太陽はまぶしかった。森、山、すべてのものに明るい光が降り注いだ。
「いま、おれは生きている・・・」
そうつぶやくと、ミギーは
「そうだな。」と淡白な声で言った。
「ミギーは相変わらずだな。」
新一はそう言うと、家路に就いたのだった。

新一にとってこの生還はパラサイトと人間との決着の始まりに過ぎなかった。

第２話　警察とパラサイト（１）

家に着くと、そこには誰もいなかった。

リビングを見てみると、軽いメモに何かが殴り書きで書いてあった。どうやら、父からの伝言らしい。母の失踪のことで、母の実家に呼び出されたのだそうだ。無論すでに母は死んでいるし、母の体も海の底だ。後藤を倒した安心感と疲れのせいか、夕食も取らずに眠ってしまった。

翌朝、突然の訪問者がきた。

眠い目をこすり、ドアを開けると、そこにいたのは平間警部だった。

「どうしたんですか。こんな朝早くに、平間警部。」

「今は、警視だ。早速だが、泉君。後藤について聞きたいことがあるから、署まで来てもらえないか。」

「今すぐですか?」

「そうだ。」

早朝に起こされ、警視に警察署まで任意同行を求められる高校生はそうそういないだろう、などと考えながら出る準備を整えた。

父さんに伝言残しとかないと・・・。

警視に呼び出された旨を昨日見つけたメモに付け加えておいた。

「さぁ、いこうか。」

険しい顔つきの平間警部、いや平間警視に付き添われ、北警察署まで行った。

取り調べ室・・・ いや狭い応接室のようなところに通された。なんの話だろうと多少動揺していたが、顔にはださない。

後藤から逃げる時に奪った車のことだろうか。あれは立派な窃盗罪。しかも無免許運転（ミギーが運転していたが）もあるし、犯罪なのは間違いない。

新一の前に座った平間警視は口を開いた。

「率直に聞こう。後藤を殺したのは君だろう。違うか?」

・・・!!??

これが驚かずにいられようか。昨日の話だぞ。この警視はいったい・・・。

「なんのことでしょう。あんな化けもん、俺なんかに殺せませんよ。」

シラをきるしかない。これがバレたら捕まることだってあり得るし、パラサイトと戦える自分がパラサイトだとバレるのも時間の問題。殺されるかもしれない。いや、そもそも昨日の事件を、しかもあんな山奥でのミンチ殺人事件を聞いただけですぐわかるだろうか。

「証拠はあるんだ。これだよ。」
平間警視はビニール袋に保管された、鉈を持ってきた。
「そ、それは…。」
そう、あの後藤にとどめをさした鉈だ。おばあさんのもののはずが、なぜここに。
平間警視は話し続けた。
「ここから車で2、3時間走ったところに、山辺村という村があって、そこの近くの山でミンチ殺人事件があったんだ。君も知ってる通り、パラサイトの犯行だと思われる。基本的に都市部に集中していたミンチ殺人が、人がいるかいないかわからない寂れた村の山奥で起こるわけがない。なぜなら、パラサイトが捕食する人間はそんな片田舎の山奥より都市部のほうが多いのは誰の目にも明らかだからだ。その話を偶然耳にしたもので、何かあるのではないかと思って、昨日その現場に行ってみたんだ。そこで見たのは、ミンチ殺人の殺害現場の近くで、パラサイトが死んでいたことだ。」
これ、完全にバレてるな。もう無理だ。
新一は話し続ける平間警視の目をじっと見た。
平間警視は動揺している新一の顔を見て、ニッと笑った。
「そのパラサイトは残念ながら損傷が激しく、顔は判別できなかった。が、例の殺害現場の近くにすむ老婆に話してみると、つい最近まで若い男を家に泊めていたと証言した。

その男はミンチ殺人が起きた夜に倒さなきゃいけない相手がいると言い残して家を去ったそうだ。そして、翌朝見てみれば化けものの死体があると話が回ってきたそうだ。その老婆によると、その男の名は『泉　新一』なんだと。おそらくこの鉈についている指紋を採取すれば、君の指紋が出るだろうな。それにこの鉈には多少持っていたものの血もついているようだ。血液のＤＮＡ鑑定をすればそれも一致するだろう。」

鉈は捨てておくべきだったな…　律儀に返すのはやはり危険だったか…。

「泉君。ほんとうのことを話してくれ。君がやつをやったんだろう??」

…　しかたない。

「なぜ、後藤の死体だと?」

「後藤が君を殺そうとしてるのは殲滅戦の時に奴が言ってるから当然だろう。そろそろ動く頃合いだとも思っていたが。」

「しかし…」

「それに君がわざわざ人気のない村の山奥に逃げ込んだのはほかの人間を巻き込まないためだろう。今すぐ君に害をなそうとしてるわけではない。話してくれ。」

「・・・・。(どうするミギー?・)」

「・・・・。(仕方ない。これは言い逃れできんな。)」

「・・・・。(平間さんに手を出すんじゃないぞ。)」

「・・・。（わかってるさ。いま私がここで奴を殺せば、確実にシンイチの体を破壊されて私が死ぬ。）」
「泉君。何を一人でしゃべってるんだね？」
「・・・。ひとりじゃありませんよ。ここにはもう一人います。」
「どういうことだ・・・。」
「おれは・・・ パラサイトなんです。」

第3話　警察とパラサイト（2）

「なに!?」

すぐさま、平間警視は拳銃を構えた。

その瞬間、ミギーはその形を露にした。ミギーがこういう公的な人間に対して自分の姿をさらすのは初めてかもしれない。

「平間さん、ちょっと待ってください。ミギーも少し待ってくれ。おれは、パラサイトとは言っても殲滅されたあいつらとはちょっと違うやつなんです。」

・・・　あぶねぇ、この人すぐ拳銃撃ちかねないからなぁ。

「どういうことなんだね?泉君。」

「今回、問題になっているパラサイトに寄生されてるのは確かです。でも、僕が寄生されてるのは脳ではないので、人間の意識はしっかり残っているんです。寄生されたのはこの右手です。」

「なるほど、奴らは脳を乗っ取るから人間の意識が残らないが、脳以外に寄生した場合は人間の意識を奪うことはできないということだな。」

口では納得したかのような様子だが、拳銃を下におろす様子はない。
ミギーは臨戦態勢を維持しながらも、口を開いた。
「シンイチが話してしまったのではもう仕方がない。我々の生存を確約してもらえるのなら、警察に協力してやってもいい。それがない限り今すぐお前を殺す。」
ミギーにしては意外な内容だった。いや、ミギーですらどうしようもない状況なのかもしれない。むかしのミギーなら容赦なく平間さんが拳銃を取り出す途中で殺してそうだ。
「平間警視、俺としては人間に協力するのはやぶさかではありません。もちろん、僕は人間を殺さないように日ごろからミギーを止めてきたので、まだ殺した人間はいません。襲い掛かってきたほかのパラサイトなら返り討ちにしたことはありますが。」
「君の気持ちはわかる。だが、この取り調べの間だけ拳銃を構えたままにすることを許してほしい。君を完全に信用したわけではないからね。」
「わかりました。」
「ちなみに、私は君が山奥で殺したパラサイトを後藤だと断定しているが、あれは後藤なのかね。」
「はい。後藤に追われてその村まで逃げてきたんです。森の中で一度対決したんですが、負けてしまい、あなたが言っていたおばあさんに助けられたんです。」

「なるほど、それで二度目の挑戦で奴を倒したと。」
「はい。」
　話しているうちに、平間警部の顔の緊張感がだんだん溶けてきた。脳を侵食されていなければ、少しは安全だと判断したのだろうか。
「一応聞いておくが、我々警察が君に危害を加えない限り君は我々に敵対することはないと思っていいのかね。」
「ミギー、いやこの右手のパラサイトは自分の生存が最重要項目なので、自分の生存を脅かす者はパラサイトであろうと、人間であろうと変わりはありません。俺は人間を殺そうとは微塵も思ってませんが、ミギーを僕が操れるわけではないので、俺に対し危害を加えようとした場合、あなた方に攻撃しないとは保証しません。確実に我々に危害を加えないと確証が得れればよりお手伝いができると思います。おれもこれ以上知り合いを亡くしたくないので。」
「なら、その右手だけをきり落とせばいいのでは?」
「そんなことをしたら僕からの栄養分が与えられないためこのパラサイトは死ぬでしょうが、俺が右手を失いますし、今後、後藤以上のパラサイトが出た場合、対処できなくなります。パラサイトを相手にするにはパラサイトを使うのが最も効果的かもしれません。」

「確かにそうだ。では、我々はほかのパラサイトから君と君の父などの君周囲の人間を保護しよう。その代わり、パラサイトに関する新しい情報や、強力なパラサイトに対する対処への協力を頼みたい。」
「了解しました。」
　そして、新一と平間警視は契約書にサインして、お互いの協力を確認し合った。
　新一は、父さんに右手のことを話す前にこの人に話すとは意外な展開になったなぁと他人事のように考えていた。少なくとも、警察から駆除の対象として命を狙われる立場ではなくなったことは大きな成果だと言えるかもしれない。
「案外、普通に話してみればよかったじゃないか。今まで、そこまでムキになって隠すことはなかったんじゃないのか？」
　ミギーが少しあきれたような顔をして答えた。
「そんな安心してる場合じゃないだろう。今回で確かに警察や自衛隊から狙われることはなくなった。人間の脅威は去ったと言っていい。だがな、そうなるとパラサイトの連中からみれば、警察と結託したシンイチほど危険な存在はない。きっと何回も何回も殺しに来るぞ。」
「そりゃ、そうだけど国が守ってくれるとは思うけど・・・。危なくなればミギーと協力すれば・・・。」

「それに、警察だって本当にシンイチに危害を加えないか疑わしい。」
「なんで？」
「普通ならこのまま警察署から返さずに、検査などを行ってもおかしくはない。シンイチに寄生してるパラサイトが右手だけとは限らないからな。例の機械で全身を調べて本当に右手だけが寄生されてるのか確認を取らないのは、あの平間警視にしては少しヌケている。」
「じゃ、まさか、家に帰らせたのは罠ってことか？」
焦り始める新一をミギーは見て、
「わからん。今日はもう疲れた。もう寝る…。」
といって、眠ってしまった。
警察の罠。そこまで考えなきゃいけないのか。
平間警視を信じたい。だが、万が一今殺されに来たら太刀打ちできない。どうする。もういちど逃げるべきだろうか…。

第４話　警察とパラサイト（３）

静かな夜。
明るい満月。
暗い夜道。
そんななか耳を研ぎ澄まし、目を凝らし、家の周囲の動きを警戒した。
まだミギーは眠っている。油断できない。ミギーも驚くこの五感があればある程度の周囲の状況をその場で把握することはできる。
コッコッコッコッコッコッコッコッコッコッコッ
だれかが家の前の道を歩いている。
誰だ。父さんか？
いや父さんにさっき電話した限りでは、しばらく帰れないそうだ。
となるとほかの家に遅くに帰る人がいるのだろうか。
時計を見てみる。午前２時。
電車もとうに止まっている。この近くでは居酒屋などは少ないため、居酒屋帰りのサラリーマンの線もない。

耳を研ぎ澄ましてみる。
コッコッコッコッコッコッコッコッコッコッコッコッ
この音は…　男の革靴ではない。
女のヒールの音か？
この高い音はヒールいやブーツかもしれない。
女。この近くに住む女か？
どうする…
コッ
止まった。これは、玄関の目の前??
まさか家の中に侵入する気か??
ミギー　起きろ!!
コッコッコッコッコッ
動き始めた…　なんだ　帰るのか??
家の前でなにを…
なにかを置いていったのかもしれない。嗅覚に集中してみるか…。
・・・。
花火のような臭い…？

あ、まずい。これはまさか。
新一はすぐに窓を開け、外に飛び降りた。
ドガンッッッッ!!!
ガギギギギギィィ!!!!!
ド――――――ン
玄関を中心に家が半壊した。いやほぼ全壊と言ってもいいかもしれない。
やはり爆弾か。むちゃくちゃな。普通の高校生の家に爆弾しかけるか???
ほかのパラサイトのしわざか？
しっかり気を張っていたから助かったものの、これは逃げていなかったら死んでいたかもしれない。
ともかく、何者かが命を狙ってるのは間違いない。
「どうした?シンイチ。」
爆弾犯か?そう思って思わず飛び跳ねた。
「家が燃えてるじゃないか。何があったんだシンイチ。」
はっと思って右手を見るとミギーが起きていた。
「誰かが玄関に爆弾を仕掛けたようだ。なんとか気づいて逃げたんだよ。」
「玄関までとりあえず行ってみよう。シンイチ。」

玄関まで行くとそこには玄関はなかった。

「おかしい。」

ミギーがそうつぶやいた。

「どういうことだ。ミギー。玄関に爆弾を仕掛けられたからこうなったんじゃないのか？」

「いや、それにしては家が壊れすぎている。玄関の壊れ具合からして、家がほぼ全壊するほどの爆弾が玄関についていたとは思えない。」

「じゃあどうして全壊したんだ？」

「家の支えの要所に爆弾を仕掛けて連動させたとみるべきだろう。」

「なんだって!?」

ともかく、いま家の前にいたら近所の人たちが出てくる。面倒だから逃げるか。犯人が近くにいる可能性だってあるんだ。それを追うのもわるくない。

まずは、新一は近くの公園の遊具に隠れて身を潜めた。ミギーは家を壊されて怒る新一を諌めて言った。

「まぁ落ち着け、シンイチ。家を壊されて腹立たしいところだが、今動けば殺される可能

性もある。しばらくここで待機して、朝になったら警察のところにいこう。」
「なんでだよ。警察から帰ってきて即こんなことがあったんだ。どう考えても犯人は警察関係者だ。なんで敵地に踏み入るようなことをするんだ。ミギーらしくもない。」
「シンイチ。いつも言ってる逆転の発想だ。」
「どういうこと?」
「警察から帰ってすぐ爆弾を付けたということは、手段を選ばずに我々を殺したいという意図は明確だ。だが、それなら警察内で強行してもおかしくはない。警察署を出た瞬間に車でひき殺すとかなんでも方法はある。なんなら警察署内に爆弾を仕掛けてもいい。しかし、警察署では仕掛けられないから家に仕掛けたとみるべきだ。」
「なるほど、でも警察署にいって犯人に生きてることがばれたらどうする。」
「むしろ、犯人が警察署内にいるなら、我々が来ることで何かしら反応するかもしれない。だが、警察署内にいる間は絶対安全だ。それと、あの平間警視に会う必要があるだろ。奴の仕業なら契約違反はなはだしい。それを確かめるためでもある。」
　朝を待って、新一は警察署に向かった。